

本発表では(1)にみられる分離疑問文(split questions, 以下 SQ)という現象をいかに適切な派生過程のもと分析するべきかに焦点を当てる。

(1) Which shrub did you plant, the rhododendron?

(Arregi 2010. 563)

(1)の特性は、wh-部分と付加疑問文の部分が区切られ、疑問文と後続する付加疑問文の部分とその返答という二重疑問文構造となっている。これまでの分析として Camacho(2002)は単一節から成立する(2)を、Arregi(2010)は二重節となる(3)の派生段階を仮定している。

(2) Step1 …[VP plant [sc the rhododendron which shrub]]

Step2 [CP1 which shrubi … [VP plant [sc the rhododendron which shrub]]

(3) Step1 [CP1 what treei [CQ planted Juan ti]][CP2 planted Juan an oak]

Step2 [CP1 what treei …planted Juan ti]][CP2 an oakj planted Juan tj]

(2)は最初に Tag と目的語とが併合した小節構造からの Wh 移動を、一方(3)は CP1 の WH 移動後、CP2 の残りの部分が削除される 2 重の CP 構造を仮定している。

上記分析にある問題点を提示するべく López-Cortina(2007)の主張を概観する。具体的に①長距離 SQ と疑問文との間に見られる容認度の相違が網羅できない点、②動詞の語彙特性に応じて SQ の容認度に差が見られる点、③イントネーションブレイク部が意識されておらず意味側面まで説明できない点がある。これらの問題点解決へ向け、López-Cortina の提案する Confirmation Phrase という基本構造を取り入れ本発表独自の派生過程を提示する。

(4) Step1 … [Conf' P [TP1 you planted [SC which shrub the rhododendron]]

[Conf' φ [TP2 you planted [SC which shrub the rhododendron]]]

Step2 … [Conf' P [CP1which shrub [TP1 you planted [SC which shrub the rhododendron]]

[Conf' φ [CP1[the rhododendron [TP2 you planted [SC which shrub the rhododendron]]]]

Conf' P 主要部には[+wh]素性をそれぞれ設定し、ここから TP1 に一致、格素性が TP2 には[+wh]素性と端素性がそれぞれ分散して継承される。次にそれぞれの CP 指定部領域に名詞句の移動後 TP2 を削除できる。かくして SQ では CP1 では Wh 移動が行われて CP2 に[+wh]素性は残るため意味的な側面をさらに動詞の語彙特性と Conf' P との素性照合をも意識する事で先に述べた容認度の差も説明できる。

語の語彙化と頻度に基づく一語化の違い

高橋勝忠 (京都女子大学)

語彙化(lexicalization)とは大石 (1988 : 78) では複合語の意味がその構成素から直接導き出されないこと(e.g. dark room 「暗室」)を指し、影山 (1993 : 8) では語の意味が特殊化され、その語を辞書に登録することを言う。また、島村 (1987 : 171) ではレベル配置形態論におけるレベルの下降として仮定されている。

本発表では高橋 (2009 : 185) で提案した語彙化の要因 (1) を再検討し、(1a) の語の頻度に基づく語彙化は (1b, c, d) の語彙化とは異なる過程であり、頻度に基づく一語化として区別する必要性があることを主張する。

(1) a. 語の頻度に基づく語彙化 (e.g. discernment と employment)

b. 音韻的語彙化 (e.g. comparable と c omparable)

c. 形態的語彙化 (e.g. cultivable と cultivatable)

d. 意味的語彙化 (e.g. cattish と catlike)

語彙化は語が名付け機能によって慣習化され、1 つの語彙項目として辞書の中に組み込まれ、通常の規則によっては予測されないような音韻的、形態的、意味的特徴をもつ。「赤い羽根」や「油を売る」のような統語部門で生成される句や文からの語彙化もあるが本発表では扱わないで、派生語と複合語の語彙化に話を絞る。

(1b) の音韻的語彙化には同化(e.g. *inregular→irregular)、強勢移動(e.g.  atom→at omic)、3 音節短母音化(e.g. vane→vanity)、複合語強勢(e.g. black+board→blackboard)、日本語では濁連(e.g. 豚+しる→豚じる)、アクセント句の平板化(e.g. だ¹いすけ+は¹なこ→だ¹いすけは¹なこ) などがある。

(1c) の形態的語彙化には Aronoff (1976) の調整規則である切り取り規則(e.g. curious→curiosity)や異形態規則(e.g. permit→permission)があり、日本語には動詞の連用形が名詞化する転成名詞がある(e.g. 受ける→受け)。また、日本語・英語に見られる混成語も形態的語彙化の過程に位置づけられる(e.g. ピアノ+ハーモニカ→ピアノカ)。

(1d) の意味的語彙化は語彙化の過程として形態・音韻的変化を伴うのが一般的であるが、それらを伴わないで語彙的変換だけが生じるものを示す(e.g. consider→considerable)。

(1a) の頻度に基づく語彙化は Hay (2003) の派生語の頻度数を基体の語の頻度数で割った相対的頻度(relative frequency)を示したもので、心理的要因が左右する。例えば、上記の discernment は employment の派生語と比べ、相対的頻度が低いので-al の接尾辞が後者より付加しにくいと考える。いずれも辞書では-al 不可を排除するので語彙化は生じていないとみなされるかもしれない。しかし、developmental の派生語や順序付けのパラドックスを生じさせる ungrammaticality における ungrammatical の語根化の可能性(e.g. 荒木(1989) も頻度に基づく一語化の過程であると考えられる)。

本発表では(1a)の語彙化は日本語にも観察されることを示す。「～っぽい」は名詞、形容(動)詞、動詞の連用形に付加する接尾辞であり(e.g. 男っぽい、荒っぽい、気障っぽい、忘れっぽい)、田村(2004: 37)によると「白っぽい」「黒っぽい」は頻度数の高い語である。明鏡国語辞典には「白っぽさ」「黒っぽさ」の派生名詞形が載せられている。「素人らしさ」「玄人らしさ」の語彙化した意味と「白みを帯びている状態」「黒みを帯びている状態」の中立的な意味が載せられている。前者の語彙化した意味は(1d)の過程を通し、後者の中立的な意味は(1a)の過程により生成されると仮定する。一般的に、中立の意味を持つ派生語は「-さ」や-nessの接尾辞を取らない(e.g. *黄(色)っぽさ、*白色っぽさ、*犬っぽさ、*youngishness, *biggishness, *babylikeness)。しかし、中立の意味を持つ派生語も「白っぽさ」「黒っぽさ」に見られるように「Xっぽい」の頻度数によって「-さ」が付加できるように思われる。本発表では(1a)の過程で生成される派生語を辞書に記載すべきかどうかについても考えてみたい。

ME/a/の発達過程について

平郡秀信 (中京大学国際教養学部)

英語音韻史の当面の目標はあくまでも標準英語の音変化の歴史を辿ることであり、19世紀以来、古今東西を問わず多くの学者が研究を重ね今日に至っている。特定の音韻の発達過程及び特定の時代の音韻の音価もかなりの程度にまで判っているものの、その細部においては依然として確定しがたいものが残っている。英語はGVS(大母音推移)の結果、標準英語ではME/a/:ME/ai/, ME/ɛ/:ME/e/, ME/ɔ/:ME/ɔu/, ME/ɛu/:ME/eu/はそれぞれ単一の母音に融合した。しかし、初期近代英語期の著名な詩人の脚韻の中に、現代英語では不完全韻と思われるME/a:/, /ai/:ME/ɛ:/, ME/u/:ME/ɔu/, ME/i/:ME/ɔi/, ME/ɔ/:ME/o:/, ME/ɔ/:ME/au/, ME/a/:ME/ɛ/, ME/ɔ/:ME/u/等が数多く見出されている。これらは現代英語と同様、初期近代英語期でも不完全韻であったのであろうか。それとも何か他の説明が可能なのであろうか。脚韻収集という仕事は時間がかかることもあって、音韻論学者はME/a/のrime-mateを組織的に発掘していない。今回の発表では、現代英語では融合問題が生じていない、ME/a/の発達過程を取り挙げる。ME/a/の発達過程を推定するのに何らかの手がかりを与える脚韻は

- a) ME/a/:ME/ɛ/(back:neck)
- b) ME/a/:ME/ɔ/(man:on)
- c) ME/a:ME/i/(father:hither)
- d) ME/a/:ME/u/(adder:shudder)
- e) ME/a/:ME/a/(am:name)
- f) ME/a/:ME/ɛ/(cat:eat)
- g) ME/a/:ME/ai/(man:plain)

であり、これらの脚韻がどの時期から、どの程度見出されるかが判れば、ME/a/の発達過程を辿ることが可能となる。時間的余裕があれば、今発表の成果を踏まえると、GVSはどういうふうにも再解釈されることになるか、筆者のGVSに対する見解を開陳し、聴衆の批判を仰ぐことにする。

「生きる力」ーブロンズン・オールコットの教育観からー

水本有紀（甲南大学非常勤講師）

現代の日本ではゆとり教育の見直しを含め、早急の教育改革が求められている。2009年には学習指導要綱の基本理念である「生きる力」を育成するための具体的な学習指導法が改訂された。要綱によれば「生きる力」とは、「自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」「たくましく生きるための健康や体力 など」である。この「生きる力」という言葉は、知識を一方向的に押し込む従来の教育から、子どもが自ら学び、考える教育への転換の必要性に応じて、1996年の中央教育審議会第一次答申において初めて登場した。この教育理念は、外から知識を詰め込む（pouring into）教育が主流だった19世紀アメリカにおいて、子どもが本来持っている能力を引き出す（drawing out）教育を理想とした一人の教育家の存在を想起させる。超絶主義者ブロンズン・オールコットは、子どもの善性を唱え、子どもが自ら学び向上しようとする力を伸ばす教育を目指した。本発表の目的は、現代日本の教育課題を視野に入れながら、超絶主義者ブロンズン・オールコットの教育思想を自己教育、道徳教育という観点から再評価することである。

オールコットの教育観の基本的特徴は、個人としての児童の尊さを強調したことにある。オールコットは原罪説を基盤とするピューリタン教育に対し、神性こそが人間の本性であるとする、超絶主義的人間観を自らの教育方針とした。オールコットの教育観によれば、子どもの中にはすでに学ぶべきこと、発展すべきことが神によって植えつけられており、教師は子どもに内包されている能力の萌芽を導く役割を担っているのがあった。したがって、オールコットは、外から強制的に働きかけるのではなく、子どもの自発的な活動を促すことによって、子どもの自己教育力を高めようとした。

超絶主義は、個人の尊重という特徴から、社会との関わりを顧みない個人主義的教義だという誤解を招くことがある。しかし、超絶主義の説く個人主義は、個の内で完結してしまうものではなく、社会との相互関係の中において社会的存在としての個を尊重する側面を持っていた。超絶主義における個人から社会への視野の拡大は、オールコットやエマソンが道徳教育を重視した点にもつながる。オールコットは、道徳的な内容を教材として利用したり、他者との関わり合いを前提とした「会話」を授業に取り入れたりしながら道徳教育を進めた。

「アメリカのペスタロッチ」と呼ばれたことから分かるように、オールコットは19世紀から20世紀初頭に世界的規模で展開された新教育運動の先駆けとなった。その運動の根本理念である、子どもの自主性を重んじるという考えは、まさにオールコットの超絶主義的教育観を反映している。もちろん、新教育運動は日本でも広まったのであり、日本の教育の歴史にはオールコットの教育思想が少なからず影響しているのは事実である。現代の日本の教育が課題とする「生きる力」とは、超絶主義風に換言すれば、自己の内にある神性（真理）を知り、それに従う術を知ることであり、自分自身を深く理解する力であるとも言える。

破り捨てられた Mark Twain の恋文

和栗 了（京都光華女子大学）

Mark Twain (1835-1910)が Olivia Langdon (後の Olivia L. Clemens, 1845-1904)に書いた手紙は Clemens 家の宝物として大切に保管されてきたにもかかわらず、一部が欠落している。恋文の一部が破り捨てられたものがあるのだ。今回の発表は、彼の恋文の破り捨てられた部分に何が書いてあったのか、なぜ捨てられたのか、誰が破り捨てたのかを推測し、再構築する試みである。これにより、Twain が何を意識してものを書いていたのか、Twain とはどのような人物であったのかを明らかにしたい。

Twain が最初に Olivia に手紙を書いたのは、1868年9月7日（と8日）である。そして Twain は1910年4月21日の自らの死の直前まで Olivia を崇拝する言葉を記していた。どこからどこまで Twain の恋文が断定しにくいので、ここで扱う恋文は二人が結婚する1870年2月2日までに Twain が書き Olivia のもとに届いたものとした。

この1868年9月から1870年2月までの17ヶ月の間に Twain は184通の恋文を Olivia に送り、彼女は自らそのすべてに通し番号を付け、大切に保管していた。長女 Susy Clemens が10歳の時に読みたいと訴えたが、あなたにはまだ早いわ、と母親から断られたという。まさに家宝であった。

ところが、1868年10月4日（と5日）付の、通し番号3通目の手紙の本文がなく、追伸のみが残されている。今回はこの破り捨てられた手紙を検証する。

Twainの作品が妻 Olivia あるいは家族により「編集」されたとする主張は既に神話になりつつある。彼が修正や削除を予想して作品を書いていたことは明らかになっている。当時のアメリカの社会通念や自らに期待されている人物像を十分に意識して Twain が作品を書いていたことは彼の最新の『自伝』からも明らかである。

Twainの手紙を最も過酷に破り捨てたのは彼の母親 Jane Clemens であり、彼女と比べると Olivia は Twain の恋文を「編集」しなかった。それでも一通は遺失している。Olivia が「編集」したのではないとすれば、破り捨てたのは Twain の可能性が高い。だとすれば Twain は自分のどのような側面を隠そうとしたのか、興味は尽きない。今回の発表は3通目の恋文を復元する試みにとどまらず、文学者 Mark Twain の隠された実像を明らかにすることになる。

A Mercy——鏡に映る母の顔

齋藤 幸恵（甲南大学大学院）

Toni Morrison といえば今やアメリカ文学を語るうえで避けて通れない作家であるが、*A Mercy* (2008) もまた、アメリカ建国以前の歴史を語りなおす秀作として多くの読者に温かく迎えられた。この作品は天涯孤独の男がアメリカでささやかな財を築き、信頼できる妻と奴隷、使用人たちのみで暮らしている様子とその崩壊を描いた物語である。登場人物たちは皆孤独な身であるが、立場を越えてお互いを家族のように思い、ここは理想郷だと自負していた。しかし鍛冶屋の自由黒人の出現により家族の結束は揺らぎ、ジェイコブが死ぬと残された者たちは奴隷制の確立へと向かう大きな波に巻き込まれていく。

17世紀のアメリカ大陸という奴隷制以前の、差別と人種の関係がイコールではなかった時代に生きた社会的弱者たちを描いた *A Mercy* は、特権階級の白人男性の視点から語られてきたアメリカの歴史に黒人奴隷、自由黒人やネイティブ・アメリカン、年季奉公人などの視点を組み込むことに確かに成功している。特に黒人奴隷の少女、フロレンスによって語られる部分には黒人であるという意識の芽生えや、奴隷であるという環境が少女の自己や人の愛し方に与えた影響などが生き生きと描かれている。それに加え、Morrison の批評で幾度となく取り上げられる特徴、すなわち語り手の構成が凝っており、多様な解釈を可能にする様々な謎やメタファーが散りばめられていることから *A Mercy* は非常に Morrison らしい作品であると言えるだろう。

A Mercy には鏡が頻繁に登場する。主人公である黒人奴隷の少女フロレンス、以前は船上で生活していた謎の少女ソロー、その二人が仕える家の女主人レベッカがそれぞれ鏡を覗き込む場面があり、鏡は物語のなかで登場人物の運命を決めるほどの重要な役割を担っている。Morrison が好んで使うメタファーはいくつか存在するが、その一つが鏡である。鏡は複数の作品の重要な場面で登場する小道具であるため、鏡には Morrison の強いメッセージが込められていると考える読者もいるだろう。鏡はラカンが指摘したようにアイデンティティの形成と深く結び付いた有益な道具である一方で、ナルシスの神話にあるように人を死に至らせる危険を秘めた道具であると認識されているように思う。さらに女性にとっては美しさという他者によって定義される優劣の基準を映し出すものでもある。鏡とは便利ではあるが危険であり、それでも人を魅了するものなのだ。

Morrison も鏡をそのようなものと認識し、作品に利用しているのであるが、そこに込められた意味はこれまでの鏡のイメージを覆すものであり、これまでも白人中心の文学の伝統に新しい風を吹き込んできた Morrison 独自の解釈が表れていると言える。今回の発表では文学における鏡の解釈の例を紹介しつつ、それを Morrison の描く鏡と比較してみたい。Morrison の描く鏡のなかでも特に *A Mercy* の鏡は「母」を意識させるものであり、登場人物たちは母が暗示される鏡を覗き込むことで自分の顔を見る以上の経験をしている。そのことを踏まえ、作品における「母」と鏡の関係に言及し、Morrison の鏡に映るメッセージを明らかにしたい。